

Trial & Error

No.291

November-December 2011



特集

生き残った私たち2

福島県南相馬市に立ち上がった災害FM局「みなみそう
まさい FM」スタジオの ONAIR 後の風景。DJもディ
レクションも地元の人が担っている。

生き残った私たち 2

福島にどう関わるか、
関わられるか

代表理事 谷山 博史

前号に引き続き、東日本大震災関連の取り組みを取り上げる。今回は原発事故が起きた福島県内での活動だ。そこで今も暮らしている人たちは何を思っているのか、また放射能の問題があるにもかかわらずJVCはどうして取り組むのか。どのように振るまうのか「正解はない」なかで、JVCが何を指針としているのかを読み取っていただきたい。(編集部)

■ 混乱・避難・分断

「避難車のヘッドライトが流れて、今夜はいつここに辿りつくのか」(南相馬 根本定子^{※①})。

今回の原発事故直後の避難の様子をうたった歌である。震災後の一週間、報道では三陸沿岸の津波被害のすさまじさや原発事故に対する政府の対応ばかりに焦点が当たっており、福島で何が起きているのかの情報不足していた。しかしこの歌にあるように、福島第一原発の近隣自治体は大混乱で避難者の列が延々と続いていた。逃げるのか逃げないのかで家族の意見が対立し、父母を置いて逃げざるを得ない人々も多かった。時間がたち放射能の飛散状況がわかってくるにつれて、この事故の深刻さが現れてきた。

■ 「福島チーム」を設置

JVCは震災のあと一週間で自宅待機とした。自宅待機を終えた直後の三月二十二日に開かれたスタッフ会議での議論が、JVCの福島への関与を決定づけた。スタッフの一人から「なぜ福島に行かないのか」という意見があがったのを皮切りに、福島支援の行動を起こすべきとの意見が続出した。「今回の災

害は地震、津波、原発事故の複合災害だ。エネルギーの観点から、もっとも取り残されていく人々という観点からも福島に関わらないのはおかしい」、「原発産業の構造は私たちの豊かな生活が途上国の人々の犠牲の上に成り立っているという構造に直結している。海外のことも国内のことを重ね合わせて訴えていかなければならない」、「農民が農業ができなくなる可能性がある。避難先を提供したり土地を提供したりできないか考えた」、「私たちの生活の見直しと支援を結びつけた中長期的取り組みが必要だ」。

これらの発言には、JVCが長期目標で掲げる「地球環境を守る新しい生き方を広め、対等・公正な人間関係を創り出す」という理念が反映している。この議論を受けて、JVC内に原発事故の被災者支援を検討する「福島チーム^{※②}」が設置された。

■ 放射能という壁

福島チームは支援活動調査のための情報収集を始めた。様々な知己を通じ集めた情報から、支援のターゲットは農家や南相馬の人たちに絞られていった。しかしここで問題が生じた。福

島での支援活動も、そのための現地調査もスタッフの放射能被爆のリスクが伴う。

放射能は目に見えず、空間線量を測ったとしてもどこまでならば安全だという閾値^{しきい値}もない。またリスクに対する考え方はそれぞれに異なる。福島チーム内でも同じ線量に対して危ないと見る人と、そのくらいリスクは活動する以上しかたがないという人で意見が分かれた。共通の基準を作らなければ調査にも行けず、その先の活動を想定することすらできない。まず暫定的な「行動基準」を四月一日に作成し、その後必要に応じて改定していくことにした(その後七月二十二日に改定)。

■ 南相馬市、災害FM局

南相馬市は、津波の被害によって約六百五十名の死者・行方不明者を出す一方、原発事故の影響で住民は避難や避難準備を余儀なくされていた。市役所は政府による避難指示から地区ごとに別々の対応をしなければならず、住民とのコミュニケーションは困難を極めていた。防災無線も破壊され、市の広報誌さえ発行できなかった。この状況を踏まえ、支援のキーワードは「情報」であることを確信し

※注① 歌集『あんだんて』より。

※注② 代表谷山以下スタッフ+インターンの計8名、通常業務との兼任として構成。



■三春町、日本三大桜のひとつである滝桜。



■ミーティング中の「みなみそうまさいがいFM」。時に意見をぶつけあいながら放送内容を決めている。

「農民は買ってくれる人がいなくても植え続けるしかないんだ。植え続けなければ心が折れてしまうんだ」と郡山で有機農業を営む中村さんは呻いた。三

南相馬では引き続きこの放送局を支援しながら、別途放射能被害で苦しむ子どもやお母さんたちを支援する活動を模索している。

■三春町、農民支援

農民支援の調査では、郡山市や三春町の農家を訪問した。彼らの話から、福島農家が置かれている窮状が想像以上であることを知った。四月始めの時点ですべての作物の作付が禁止さ

れてきた。そして誰もが今後作付が許されたとしても、消費者に拒否されるのではないかという危機、政府の安全基準に対する懐疑、そして農業の行く末についての不安に苛まれていた。「農民は買ってくれる人がいなくても植え続けるしかないんだ。植え続けなければ心が折れてしまうんだ」と郡山で有機農業を営む中村さんは呻いた。三

た。市役所と住民、住民と住民、避難者と市内に留まる住民をつなぐ情報ツールとしてのFMラジオである。ラジオ受信機の支援とラジオ局の側面支援、そして市外の避難所でラジオが聴けるようにインターネット環境を整備する支援に方向を定めることになった(次ページの檜崎報告を参照)。

春町の会沢さんは、「みんなが息を殺して家にこもっている。滝桜の花見祭りも中止になった。このままではみんなだめになってしまう」と言う。この時私たちの間に、日本三大桜で有名な滝桜の花見祭りを自主開催し、全国の有志を集めて農家と語る機会を作ろうという方針が固まった。

「花見祭り」には福島内外から百名以上が集まり、農家の苦しみと放射能の危険性についての腹藏ない意見交換の場となった。これをきっかけに三春では女性を中心に農産物加工グループがつくられ、十月には「収穫祭」が開催される。JVCも実行委員として企画に当たっている(六ページの西沢氏報告、本誌二百九十号国内ひろばを参照)。

■視点を変えずに関わる

JANIC(国際協力NGOセンター)が六月末に実施したという調査によると、福島で支援活動を行なうNGO団体は宮城県五三%、岩手県三二%に対して一%しかないそうだ。明らかに支援の偏りがある。それは、福島に関わるということ、原発事故と放射能の問題に否応なしに向き合わざるを得ないからではないだろうか。スタッフの

健康への危険、原発事故を起こし被害を拡散させた東電や政府の責任、放射能を巡る住民間の分裂や支援団体の間の意見の相違、そして原発の恩恵である電気に依存している私たち自身に向き合うということである。安易な関わりは禁物である。しかしJVCは関わり続けようとしている。なぜか。

JVCが人道支援に関わる際の基準の一つに「日本社会との関わり。日本市民として責任がある場合」という文言がある。「日本市民の責任」とは、今回の原発事故という大惨事にあたっては、原発のリスクと原発被害そのものを地方に押し付け果実だけを享受してきた都市住民、「沈黙する大衆」である日本市民の責任、と置き換えることができる。東京をはじめとする都市型の社会は、経済活動の両端、つまり資源の採取・生産と廃棄を外部に押し付けることで成り立っている。それが今回の事故で、原発や放射性廃棄物処理場の立地についても同様であることが改めて見えてきた。

言い換えれば、これは「問題の周辺化」、日本の地方や南の国への転嫁であって、JVCがこれまで取り組んできた諸外国での活動の背景にあるものと変わらぬ。この視点に基づいて

わらない。この視点に基づいているからこそ、国内の出来事にもかかわらずスタッフから前述のような意見が出て、JVCは現実に取り組みを始めたのだ。ではどのように関わるのか。美しいプロジェクトを描くことなどとてもできない。私たちにできるのは、地域に関わりながら被災した人々と共に悩み、人と人のつながり、コミュニティのきずなをつなぎなおすことを手伝えることである。自らも被災した南相馬災害FMのスタッフが私にこう語った。「東京の人は『危ないから逃げる』とか、『もっとなぜ怒らないのか』と外から言ってくる。なぜ東京の人からそんなことを言われなければいけないのか。私たちは私たちがちゃんとしたい。私たちがちゃんとしたい。私たちがちゃんとしたい」と。

「こちら、みなみそうま

さいがいFMです」

震災支援担当 (南相馬市駐在) 檜崎知行

■孤立する市民のために

福島県南相馬市の災害対策本部で、被災の状況を示す地図をもらった。南北にやや長い長方形の地域の海に面した東側が、赤く塗られている。津波の被災地だ。その後背地がかなり広いことは、住民の10%前後が亡くなった三陸との明らか違いだが、それでも福島県の太平洋側の多くの市町で、人口の1%前後の死亡者が出た。南相馬市でも、約四十平方キロに壊滅的な被害をこうむり、約六百五十人の死者が出た。

また、市域は二本の線によって南北にほぼ三分されている(左図参照)。事故があった東電福島第一原子力発電所から二十キロと三十キロの距離を示す同心の円弧の線だ。南から、人が住むことができない警戒区域、緊急時にすぐ避難のできる人だけが住むことができる緊急時避難準備区域、そして国からは避難の指示が出ていない区

域となった。この三つの地域は、偶然にも南相馬市が合併する前の旧小高町(現小高区、約一万三千人)、旧原町市(現原町区、約四万七千人)、旧鹿島町(現鹿島区、約一万二千人)にほぼ重なる。

原発事故が深刻化し、政府は避難や屋内退避を指示した。南相馬市は全域の市民に避難を呼びかけ、避難用のバスも出した。その結果、三月末の時点で約七万人のうち六万人が市外に出たとされている。その結果、市内への物流ルートが途絶え、ガソリン、食料をはじめ、すべての物資が枯渇し、残っていた住民の生命の危機すらささやかれた。桜井勝延市長がチューブで世界に救援を訴えたことは、よく知られている。

JVC代表の谷山らが最初に南相馬に入ったのは、その後であった。郵便、新聞、小荷物の宅配は機能しない。様々な情報を市から住民に伝えようにも、防災無線も市の広報紙を配る自治組織のネットワークも失

われていた。このままでは、行政サービスから住民が取り残されかねない。谷山らは、情報伝達的手段として「臨時災害FM放送」の存在を市に示唆した。数日後、臨時災害FM局を開局したこと、その体制が貧弱であること、また放送してもそれを聞くためのラジオがないことがJVCに伝えられた。携帯ラジオを集めることから、JVCの南相馬への支援は始まった。

ラジオが千百台集まった五月初旬、谷山、私を含めた数人が再び南相馬市に入った。私は初めて見る津波被害の惨状、市民の半分以上が避難したままの町のありさま、そしてなによりも、立ち上げたばかりのFM局「みなみそうまさいがいFM」をほとんどDJ二人だけで運営している状況を見て、ここへの駐在を志願した。

■より良い放送を目指して

私が支援に入った当時のFM局は、一回一時間、一日三回、土日もなく毎日、市など行政から提供される資料をDJ二人がほぼそのまま読んでいただけという状態だった。こうした資料は、論旨は回りくどく、表現は難しく、多くは冗長でもあった。これを読みやすく、わかり

やすい原稿にすることから、私の仕事は始まった。

また、行政から与えられた情報だけではなく、自主取材での原稿を徐々に増やしたり、地元新聞の記事を要約して紹介するコーナーを作るなど、聴取者が楽しめる放送に近付けようとした。そのかわら、音楽放送用のパソコンの導入など、機器の充実も図った。聴取者参加型のラジオにするためにメールでの投稿を呼びかけ、運営体制の弱さを補強するためには放送でボランティアを募集した。

市外に避難している人からは、市内の情報を見ることが多く市当局に届いていた。しかし、災害FM局の電波は市内にしか届かない。そこで、市外へも放送を届けるためにインターネットを通じてのラジオ放送をサイマルラジオを通して実現させた。これで、パソコンさえあれば、世界のどこにいても、放送を生で聴くことができるようになった。県外に避難した人にも、群馬県の避難所で試みた。

ついで、神戸の「FMわいわい」の協力で、放送の同時録音も可能になった。パソコンや放送に強いボランティア二人のおかげで、その同時録音を使っ



■オンエア中のスタジオ。DJは全員が南相馬市民。地元の言葉で話すことで伝えられることもある。



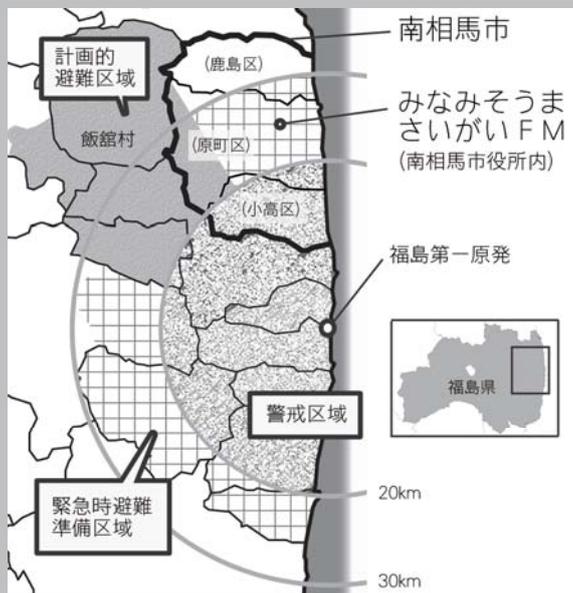
■JVC が提供したラジオ。支援者の方々の協力を得て、品不足の中で台数を集めた。



■「福島第一原発から 20km」の境界の検問。これより先は「警戒区域」に指定され、立ち入りが禁止されている。(南相馬市)

福島県南相馬市の臨時災害 FM 放送局の運営支援

■南相馬市の概況



原発事故の影響により、南相馬市は南側の小高区全域が立ち入り禁止の「警戒区域」、中部の原町区が「緊急時避難準備区域（9月末に解除）」、同区西側が順次避難の「計画的避難区域」に指定されている。

◎被害

死者／行方不明者 663人（9月1日時点）
避難者数 約3万人（人口約7万人）（9月1日時点）

■活動の目的

南相馬市でのラジオの配布、及び放送の運営支援。FM 放送の運営体制構築を目指し、市と市民の円滑な情報伝達を可能とする。

■活動の経過

4月14日	災害 FM 放送がスタート。
5月上旬	南相馬市の要請でラジオ1,300台を市に提供。
5月中旬	放送局の運営支援のために檜崎が現地へ赴任。番組作りのサポートを開始する。
6月下旬	県外に避難している方々がラジオを聴けるように群馬県東吾妻市で避難する南相馬市民が放送を聞けるように機材を設置。
9月11日	震災から半年の特別番組を制作、放送する。

て、午後九時から再放送すること、新設したホームページから過去の放送が聴けるようにすることも可能になった。その他にも、ホームページには市内の様子を写真入りで紹介した記事やラジオ放送を文字に起こした記事も掲載して、市外に出ている人への情報提供に努めた。

七月からは、国の緊急雇用事業を活用することでスタッフの

数も増強され、FM局の運営も軌道にのって来た。より聞きやすく充実した放送や、地元の間だけで運営が可能になることを目指して、スタッフのスキルアップや運営体制の改善を図

■分裂した市民に向き合って

大震災から半年がたち、九月末には緊急時避難準備区域が解除されたが、約三万人が市外に避難したままだ。そして、市内に住む人の表情は暗い。放射能に対する不安、未来に対する不安、賠償額への不安……

外からは見えにくいのが、もっとも厳しいのは、市民が分断されてしまったことだ。最初に述べた三つ（あるいは六つ）の地域の差は、東電の賠償金額や義援金の分配における利害の相反に直結する。避難すべきかどうか、専門家の意見も違うことを、市民一人ひとりが自己責任で判断しなければならぬ辛さもある。そしてそれは、家族内での亀裂を生む。孫との同居を望み自分で作った野菜を食べさせたい祖父母と、避難や安全を重視する若い親が対立する。仕事を続けたい夫と、子どもと避難したい妻が対立して、別居する。友人知人とも分裂する。懊悩の末に残留や帰還を選んだ母親に、「子どものことなん

「風評被害」に負けない社会を

農業ジャーナリスト 西沢江美子

■稔りの秋は迎えたが

3・11以来、初めての稔りの秋。あの日から何度目かの福島県三春町へ。台風や豪雨などの後、久しぶりに晴れ、車窓からの風景は、福島原発事故などなかったように、いつもの黄金色の田んぼ。だが、目をつぶりたくなる。「こんなに一生懸命に実をつけた稲が、何事もなくみんなの食卓に届くように」。私は心の中で念じていた。

三春の秋は、刈り入れを待っている稲、甘そうに熟れたイチヂク、少しの空地も放らないで作られたカボチャにサツマイモ、ダイコン、どれも「あの日」がなかったようにすっかり食されることを訴えている。「あの日」、本当に怒りや不安、そして悲しみを通り越して、生きていくことさえ失ってしまったよ

うな、真つ暗な穴につき落とされていたあの春を根っこにしっかりと抱えながら、いまさまざまなものを抱えながら、いまさまざまの福島原発事故の放射能で、県中部で原発から四十七キロにあ

る三春町は、「外に出るな」「田畑を耕やすな」「野菜の種子をまくな」などという異常な春を迎えていた。樹齢千年を超える三春町のシンボル「滝桜」の花見さえ危ぶまれた。日本各地でも、花見も祭りも酒盛りも、「日本はひとつ」「がんばろう日本」に自粛させられていった。

一人ひとりの五感（六感）で、原発事故というすべての生命を危険にさらしているものも、土や海と共に生きる農漁民と、これから十年、二十年と寄りそいながら生きていくしかない。「滝桜の花見をしよう」。

東京を中心に全国から原発事故をなんとかしなければという想いの人たちの二台のバスによって、四月下旬に「滝桜花見祭り」は催された。

この花見で沢山の芽が出た。そのひとつが、九州福岡市にある「九州産直クラブ」との出会い。生産者と消費者が出資し合

い「協同組合」のような事業体で流通販売をしている。いち早く東日本大震災で被災された農漁民、とりわけ福島の農漁民のことを思い、花見のバスに乗ってくれた。その後、クラブの社長自らも三春町に來られて関係者に会い、「福島の生産者」との連帯を模索し続けた。「フクシマを切り離すことなく、孤立させることなく、放射能に汚染された土地と体を我々の一部分として共有し、放射能とどう向きあっていくかを基本にこれからの日本の社会づくりを考えなければいけない」（記者発表資料）「ふくしま応援ショップ」からとして、

九月十七日に福岡県福岡市に開店するはずだった。

だが、このニュースが報道されると同時に、「福岡に福島放射能を持ち込むな」「不買運動を起こす」などの電子メールが相次いだ。その結果、『ふくしま応援ショップ』の開店は残念ながら見送られた。ここで

の販売は、震災前の収穫物の加工品やラーメン、生産地でもショップでも放射線量を測定することにしていたのに。

もう一度、三春町に集い、フクシマを、三春を孤立化させない、被害者意識を強くさせないためにも、「収穫祭」をしよう。

十月二十九日、三十日と「滝桜花見祭り」の仲間たち呼びかけ、食べてくれることを待っている三春町の農産物を収穫し、食べることにした。もちろん、汚染されていないことを祈りながら測定してである。

めぐりゆく四季を重ねていくことで、風評被害に負けない、原発のない、誰もが幸福に生きていける新しい社会を目指して、その仕組みづくりをしていきたい。

「風評被害」は、本物の生産物を適正な価格で消費者に届けられるよう苦心されてきた九州の

流通業者にまでその範囲を広げている。「風評被害」という四字に含まれるおそろしさを、ひしひしと感じている。自分の立ち位置を確認し、これから長い斗いとして世の中のすべての仕組みを変えなければならぬと集まり行動し始めた人々に対して、この情報過多社会は、電子メールひとつで、その心すら切りぎざんてしまう。これこそ、いま一番私たちが気をつけなければならぬ「人権」「差別」問題である。この問題は、放射能の問題が長引けばますます深刻化していくだろう。

■もう一度、集まろう

■芽生えをつぶす風評被害

この花見で沢山の芽が出た。そのひとつが、九州福岡市にある「九州産直クラブ」との出会い。生産者と消費者が出資し合

い「協同組合」のような事業体で流通販売をしている。いち早く東日本大震災で被災された農漁民、とりわけ福島の農漁民のことを思い、花見のバスに乗ってくれた。その後、クラブの社長自らも三春町に來られて関係者に会い、「福島の生産者」との連帯を模索し続けた。「フクシマを切り離すことなく、孤立させることなく、放射能に汚染された土地と体を我々の一部分として共有し、放射能とどう向きあっていくかを基本にこれからの日本の社会づくりを考えなければいけない」（記者発表資料）「ふくしま応援ショップ」からとして、

九月十七日に福岡県福岡市に開店するはずだった。

だが、このニュースが報道されると同時に、「福岡に福島放射能を持ち込むな」「不買運動を起こす」などの電子メールが相次いだ。その結果、『ふくしま応援ショップ』の開店は残念ながら見送られた。ここで

の販売は、震災前の収穫物の加工品やラーメン、生産地でもショップでも放射線量を測定することにしていたのに。

めぐりゆく四季を重ねていくことで、風評被害に負けない、原発のない、誰もが幸福に生きていける新しい社会を目指して、その仕組みづくりをしていきたい。

10年ぶりのピョンヤン 街、そして農村の変化

農業ジャーナリスト 大野 和興

■パラソルと携帯電話

ほぼ十年ぶりのピョンヤンだった。相次ぐ天災や経済の停滞で、北朝鮮の困難が続いていた九〇年代末から二〇〇〇年代初めに三度連続して訪れ、以来十年が過ぎた。ピョンヤンをちよつと見たくらいで、この国の現実がわかるわけではないが、街の通りを見て、やはり十年がたっているのだな、という印象を受けた。

通りに色彩があった。十年前は、モノトーンで男も女も若い人も年寄りも、みんな早足で黙々と通り過ぎていた。いま、通りの女性の見た感じ八割方は色とりどりのパラソルをさし、着ているものもそれなりに色彩豊かなのだ。色の豊かさや歩調は反比例して、足取りもどことなくゆったりしていた。

携帯電話の普及ぶりにはびつ



■ピョンヤン市内で見たパラソル。

くりした。ホテルのロビーでぼんやり座っていると、携帯を耳に当てて何事かを話しながら足早に過ぎていく男性、片隅で携帯で話こんでいる女性などが目についた。五人に三人は携帯を使っている。彩りといえば、市内の小学校。夏休みの校庭でサッカーチームの子どもたちが練習している。ひとつは赤、もうひとつは黄色のユニフォーム。まるで日本のサッカークラブと同じような光景が展開していた。

ピョンヤンというショーウインドン都市だから、という見方は十分成り立つが、それでもある程度開放が進んでいるのは間違いないだろうと思った。

■農業技術も転換

変化したのは街の風景だけではなく。八月二十五日、ピョンヤン近郊のテガン協同農場を



■テガン協同農場で植えられていた稲。

訪ねた。ここは十年前にも訪問したことがあるモデル農場である。今夏は穀倉地帯での大規模な水害が報じられていたが、この地域は水害にはあわなかつたとのことで、収穫間近の稲の出来は悪くなく、質問すると「まあまあ」だということであった。「まあまあ」とは？と重ねて聞くと、「昨年はヘクター当たり粉で六トンほどだった、今年はそれをやや上回る」ということだった。稲刈りは九月二十五日から予定しているとのこと。日本の平均単収は粉換算で六・六トンほどだから、悪い水準ではない。収量は確実に上がっている。

その理由は、密植栽培をやめたことにあるようだ。この十年で農業面でのような改革があったかを聞くと、まず第一は密植から粗植になった(植える苗の間隔をあける)ことだということ。増産と分けつ数を多くするため、ということだった。以前からの私たちの密植批判を認めただけである。栽植株数は坪当たり八〇株程度というから、ほぼ日本の標準株数である。かつてはその一・五倍はあった。化学肥料の供給体制は相変わらず厳しいようなので、やはり増収の決め手は栽培管理の在り方の変化が大きいと判断される。

かつて、密植と化学肥料の多給は北朝鮮農業の代名詞であった。それに機械化と自然を改造しての農地開発が加わり、生産力拡大主義をひた走っていた。その路線が破たんしたのが九〇年代であった。東側経済圏の崩壊による石油や化学肥料、農業機械の供給停滞、急傾斜地まで耕地を開発したことによる自然災害の激甚化などが相次ぎ、北朝鮮農業は行き詰った。二〇〇〇年代に入ってからこの十年は、この農業思想とそれに基づく技術体系の変革の時期だったのだと思う。

テガン協同農場の後に訪ねた国の農業技術の総本山、農業科学院ではその変化の諸相のいくつかを話してくれた。密植は改められ、作付体系も米一辺倒からジャガイモや麦類を入れた二毛作体系へという方向が追及された。テガン協同農場でも水田の半分は二毛作でやっているとのことだった。有機農業にも関心を持ち、例えばタニシを使った除草技術の開発も進めていると話してくれた。

自然改造から自然との共生へという変化がそこには見られた。農業という社会構造の基盤のところでも、確実にこの国の変化が始まっているということなのだろう。

住民が参加する病気予防を目指して

JVC アフガニスタン現地代表兼事業担当
長谷部 貴俊



アブドゥル・ワハブ

1974年生まれ、ナンガルハル県出身、医師。内戦のため叔父家族とパキスタンに移り住み、10年（高校1年）生まで叔父の支援を受ける。カブール医科大学卒業後、BRAC (NGO) での地域保健トレーナー経験を経て、2006年に地域保健トレーナーとしてJVCに参加。現在は、地域保健療活動のプログラム・オフィサーとして村での活動を統括している。



■研修者の前で発表するワハブ（奥）。

■住民の自発的取り組みを

JVCは、アフガニスタンにおいて地域保健医療活動として、ナンガルハル県シエワ郡ゴレク地域で〇五年から診療所支援を実施している。またこれと共に、村の保健員の育成、村の保健委員会の立ち上げ、母親教室等を行なっている。

「診療所の運営」といっても、単なる行政機能の代行だけでなく、「病気は予防できる」という意識を活動地域全般に広めることも活動の目標のひとつとして掲げてきた。その結果、二〇一〇年に行なった聞き取り調査において、村人の多くに予防の知識が広がっていることがわかった。しかし、実際にはま

だ住民主導による村ぐるみの病気予防や栄養改善の取り組みは何か起きていない。そのために今

後これらに注力しつつ、地域の中から予防や栄養改善の動きが始まるまでに必要と考えられる期間として、今後四年間を活動時期と設定している。

■経験を分かち合う研修で

この活動の統括を担っているアフガニスタン人スタッフのワハブが、愛知県にあるアジア保健研修所（以下AHI）で今年九月に開催される国際研修に参加することになった。研修から住民参加型のアプローチを習得し、今後のゴレク地域での住民主体の活動の足がかりをつかむためである。

AHIの国際研修は以下のようなものである（AHIウェブサイトより抜粋）。「自立のための分かち合い」をモットーにするAHIの国際研修は、『集まった参加者が持つ経験からお互いに学び合う「参加型」の研修です。それぞれが今までの取り組みの中で抱えている課題を明確にし、みなと共有します。そしてそれを解決する方法を、同じようにアジアの村で活動する他の参加者の経験から学び、意見をもらって考えていきます』

このように、この研修はレクチャー型のものではなく、約一カ月間（九月六日～十月十日）の研修期間において九カ国十二名の保健NGOスタッフが自分たちの実践例を共有し、参加者どうしが具体的な意見を出し合うものだ。研修の最後には参加者が各団体の活動をどう改善していきたいかを発表するのだが、ワハブの発表の時に私も参加させてもらった。

彼は、JVCの活動の中でこれまでクズ・カシコト村の三つの保健委員会との話し合いを行っていたが、具体的な予防の動きにはつながっていないことを取り上げ、まず保健委員会とどのようなミーティングを持つかの年間計画を作成するこ

とを述べた。また、これまで女性と比較してあまり活発でない男性の村の保健員についても、診療所や学校との連携を深めていきたいと発表した。保健教育についても、ただ内容を説明するだけでなく、例えば手洗いの重要性を訴えるならばデモンストラーションを行なうなど工夫したいと述べた。

他団体の事例や発表後の質疑応答で得られたいくつかのアドバイスをもとに、現在ワハブは最終的な年間計画を作成している。今後、これを基にどのように活動を展開していくか、JVCアフガニスタン事業関係者でも話し合う予定だ。

◎

活動に直接関わることではないが、ワハブは今回の研修を通して学んだことのひとつとして、「どんな大きな政策でも、住民の参加に基づき、本当のニーズに適ったものにならないといけない」という考えを持つようになったと話している。これも、今後の現地での活動に生かされることだろう。

最後になってしまったが、当団体アフガニスタン人スタッフを研修に受け入れてくださったAHIのスタッフの皆様へ感謝申し上げます。

第12期インターンが決定しました!

タイの農村で学ぶインターンシップ

タイ事業担当 宮田 敬子



■タイでのインターン生活をブログでつぶっています。彼ら彼女らの苦闘の日々(!?)をぜひご覧ください!

→ <http://www.ngo-jvc.net/jp/projects/thailand-village/>

国際協力や環境保全、NGOに関心がある人を対象に、タイの農村に7ヵ月間派遣して本当に役に立つ国際協力のあり方を学んでいく「タイの農村で学ぶインターンシッププログラム」。

このプログラムでは、NGO活動をはじめさまざまな分野での社会活動を担えるようになることを目指しています。地域への貢献や現地の村人を手伝うのではなく、参加者が農村に身を置いて、村人から「学ぶ」ということを重視しています。

99年より開始されたインターンプログラムは、今回で12期生となります。これまでは一年間のプログラムだったものを、今回は7ヵ月のプログラムに変更して実施しています。今回はインターン生として6名の派遣が決定しました。日本での派遣前研修、タイでのタイ語研修や農業研修の後に、タイの農村へ派遣されます。

新田 恭平



世界と国際協力への理解を深める、日本での生活がスタンダードではないことを身をもって知る、食べ物を作る、人が幸せになるということを考える、など様々な理由があつてこのインターンシップに参加しました。タイの農村での生活を通して自分が何を感じ、何を思うのか、とても楽しみです。

高桑 和規



以前から国際協力に興味があり、NGOや青年海外協力隊に参加したいという思いがありました。しかし、自分の目で現地を見たことがなく、今年二月にJVCのスタディーツアーに参加。そこで、現地の住民の視点が重要であること、学校や本では得られないものもあることを知り、少し長期で関わりたいという思いから今回のインターンに参加しました。

佐藤 貴徳



国際協力に携わる活動がしたい、その一点でこのインターンへの参加を決めました。タイで経験していくことは、積極的に行動し、失敗するのは当然として、怯まずに目をそむけることなく、糧にしていきたいです。今回知った農業の可能性を今後生かしていくためにも全力で取り組みたいと思います。

森脇 美彩子



高校の頃から国際協力の仕事にしたいと思い、生産能力の低い土地で農業が学べる鳥取大学の農学部に入学しました。しかし、授業だけではわからない、実際に途上国の人が必要としていくことを知りたいたいと思ってインターンに参加しました。鳥取の農を守る仕事にも興味があるので、農と人、自然と人との関わりについてもタイで見てきたいと思っています。

猪田 剛史



住宅設計を十二年間続け、多くの「家づくり」に携わってきた中で「本当の豊かさとは何か」という課題が非常に大きくなりました。合理性と利便性を追求するあまり本質的な豊かさを失いつつある気がします。今回の経験を通じて、再度生活に豊かさを取り込む手段を得ることができればと思います。

中村 真



インターンに参加した目的は、タイの農村で生活することで国際協力や環境保全に取り組むことが自分の生き方とマッチするかを再確認するとともに、メディアや本から得た知識から抜け出して「自分にできることは何か」という答えを出すことです。今回のインターンで得られるであろう答えを、より多くの人々に発信していくパイプ役になれればと思います。

父と娘

アフガニスタン事業
保健アドバイザー 西 愛子



今年卒寿^{もっじゅ}を迎えた父は、13年前に母が亡くなって以来ずっとひとり暮らしである。

頑迷で言葉の暴力もひどかった父とは反りが合わず、二度と会うまいと決意したことも一度や二度ではない。だが、どちらも年を重ね、父の剣幕は激しさを失い、私は父を育てた背景や無学の父が家族を養うのに負ったであろう苦勞に思いを馳せる力を得た。小さな島の漁師一家は食うや食わずだったらしく、貧しさゆえか家庭も温かさとは無縁だったようだ。まともに教育を受けていたらまったく違う人になったかもしれない

いとか、壊れたレコードのように繰り返す自慢話が測り知れない劣等感の裏返しとわかるようになってからは、さほど苦痛もなく常識程度の娘の役割を果たせるようになった。

その父が、7月後半に「起き上がる気力がない」と言い始め、いよいよか、と介護生活を覚悟した。めっきり食が細り何も食べようとしないので、一週間ほど通院して点滴を受けたところなんとか起きて動くようになり、牛乳とメロンパンを食べるようになった。それからは、毎朝安否確認の電話をし、夕方にパンと牛乳を届ける日々が続いていた。

何が効いたのか以前とほとんど変わらぬまでに回復したので、先日海辺の高台にあるレストランに連れ出した。30分余りのドライブも久々の遠出とあって、「よか見物じゃ」を繰り返していた父。その高揚もあったのか、料理を待つ間に幼い頃のことをあれこれ語る顔は、いつになく笑顔にあふれていた。実にさわやかな少年のようないい表情に驚いた瞬間、私の中に巣くっていた父への反感が熱を受けたバターのごとく形を崩してしまった。喜びより悔しいような喪失感のような…、娘アラシックスティ。

『わたしが明日殺されたら』

フォージア・クーフィ著/福田素子訳/徳間書店/1,700円+税



抑圧をその身で体験してきた。女性であるがゆえに生じる様々な

本書『わたしが明日殺されたら』は、近年のアフガニスタンの歴史的変遷に立ち会ってきたフォージア・クーフィという女性の激動の半生を記した自伝である。彼女は、

先日、とあるニュース番組で、アフガニスタンの特集をしていた。パミヤン州における女性の地位向上についてである。アフガニスタンにおいて女性が普通に生活する上で多くの制限があること

はよく知られた話だ。識字率は低い、外出の際にはブルカを身にまとわなければならない、親族の男性以外とは接触してはならない、などなど。しかしニュースで取り上げられた女生徒たちは、ブルカでなくスカートを身にまとい、堂々と外を歩き、男女同席で学校に通っていた。女性知事がいて、国連の事務局もあるパミヤンだからこそなのかもしれないが、いずれにしても非常に画期的だ。

長じてユニセフの職員として働くうちに、彼女は土地の人々、ことに女性の声を代弁する政治家を志すようになった。多数の妨害工作、また日々命の危険にさらされながらも、「不正や腐敗に侵されることのない政治」を信念に掲げ、国会議員となり、副議長にまで選出されて現在は大議員二期目を務めている。

アフガニスタンの北部、政治も支援も最も届きにくいパダフシャン州で、筆者はその土地の有力政治家の十九番目の子どもとして七五年に生まれた。そして、ムジャヒディンの台頭が彼女から父親と住む家を奪う。命からがら首都カブールに逃げ出した後も、今度はタリバンの支配によって北部とカブールを行き来する生活を余儀なくされる。ムジャヒディンとタリバンとの争いにより戦場となったカブールでの悲劇と恐怖、そしてタリバンに抑圧された怒りと理不尽に暴力を振るわれた女性たちへの同情がこぼれ出ている。

お知らせ ■ 本書の著者ではありませんが、アフガニスタンの元国会議員の女性マラライ・ジョヤ氏が10月半ばに来日され、各地で講演会を行なうことになっています。ご興味がある方は下記のインターネットサイトをご参照ください。 http://rawajp.org/?page_id=302

JVCは、現在9の国/地域と東日本大震災被災地で活動しています。

**東日本
大震災**

■宮城県気仙沼市

8月からは鹿折地区での生活再建支援に従事。8月1日に気仙沼事務所を開設した。沿岸部で戸別訪問し、市外への買い出しや引越しのお手伝いをした。

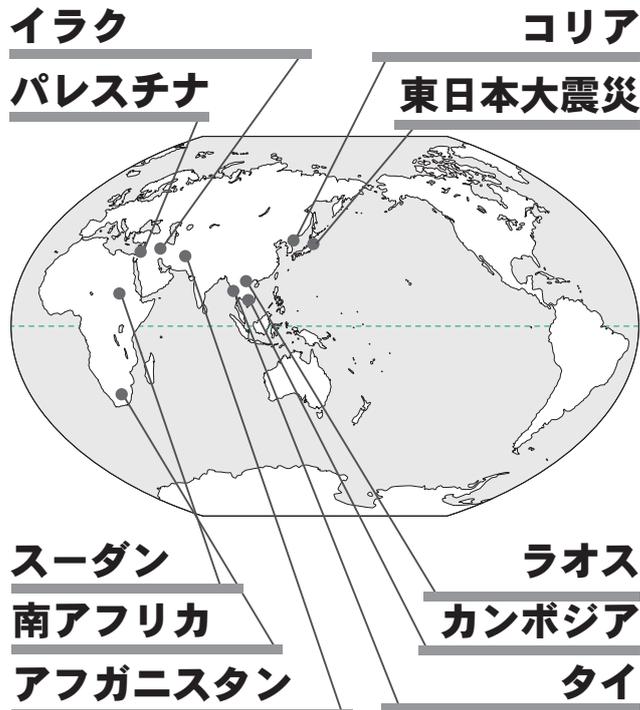
また、仮設住宅を中心に体操教室や流しそうめん大会を実施。こうした「場づくり」は、離散した人々がもう一度集い地域の問題を話し合う機会になる。その他、地元の子どもたちが仙台の七夕祭りに参加する企画に協力。(下田)

■福島県南相馬市

「南相馬災害FM」の運営支援を継続中。スタッフが11人にまで増え、独自取材を行なうなど放送のクオリティは大幅に向上した。震災から半年の9月11日には特別番組も放送。今後はJVCが抜けた後も十分な水準を保って放送を続けられるよう、スタッフの育成に注力する。(白川)



■仙台の七夕祭りでの花火。



カンボジア

■生態系に配慮した農業による生計改善 (CLEAN)

07年からシェムリアップ県東部で活動を実施。試験農場では37日間育った古い苗を田植えし、前回植えた幼苗と比較している。毎月の担当者や役割も決めて農場の運営を進めていく。

雨期で菜園が水没する農家も多いため、野菜の保護に努めると同時に、教材作りも進めている。水支援に関する情報収集のため、水と衛生関連で活動する団体を訪問。

■環境教育

09年4月からシェムリアップ県東部の小学校で実施。教師が環境教育を普及できるようになることを目的に、教師を対象にファシリテーション研修を実施した。また、2度目の植林キャンペーンを10月中旬に予定している。

■資料・情報センター (TRC)

持続的農業、農村開発、環境に関する資料を94年から提供。野菜栽培や養豚など幅広い分野の冊子・資料を農業省より入手。土壌改良に関するオリエンテーションを開催。土日の利用者が少ないことから、継続の是非を検討中。

■技術学校

85年に政府と合意し、プノンペンで職業訓練校と付設整備工場を運営。新学期が始まるまでの夏休み期間中に、オートバイ修理の短期コースを開始し生徒を集めている。(若杉)



■発芽しなかった種を調べるスタッフのコル。

ラオス

■森林保全/農業・生活改善事業 (サワナケート県)

共通活動として、終了前評価に向けたデータの収集とまとめ、分析が行なわれ、9月6日には、村人も含めた関係各方面を招いての終了前評価会議が行なわれた。また、8月上旬にアサポン郡で発生した洪水に対応して、緊急支援活動も行ない、食料や必要な物資を届けた。

農業では、SRI (幼苗一本植え) のフォローアップを行ない、除草用の手押し式自転除草機の配布も行なった。米銀行では、引き続き貸出が進められ、新規村を中心に会計などのフォローアップを実施した。家畜関係では、7月上旬のピン郡3村に続き、アサポン郡の3村でもワクチン投与告知と投与を行なった。また、6月に研修を行なったラタン (藤) とバックワーンの株分けなどのフォローアップも行なった。生育状況はおおむね順調。

森林では、ラオス国立大学の法律普及ユニットを招聘し、土地森林に関する法律研修を実施した。また、REDD+ についての会議にスタッフを派遣した。REDD+ はCO2の排出権取引に基づいた森林減少防止プログラムだが、賛否両論を招いている。その他、英国BBCによるラオスの土地森林問題のドキュメンタリー番組に、日本で紹介できるよう字幕をつけた。(平野)



■評価会議終了後の記念撮影。

スーダン

■地域開発を通じた平和づくり

活動地である南コルドファン州で6月上旬に勃発した政府軍とスーダン人民解放軍(SPLA-N)との戦闘により、事業は一時休止、現地代表の今井は首都ハルツームに緊急退避したのち日本に緊急帰国した。

日本帰国中の今井は、事業の支援者、関係者に対して一時休止に至った事情を説明するとともに、札幌、福岡、東京など各地で活動報告会を実施した。東京事務所内では、団体としての安全対策についての議論を重ねた。

この間、現地では空爆を伴う戦闘が州全体に拡大、人道支援団体の推計では20～30万人が影響を受けている。州都カドグリでは1万5千人が避難生活を送り、また2万人が国境を越え難民として南スーダンに逃れた。さらに、9月上旬には南コルドファン州の東側の青ナイル州でも同様の戦闘が始まり、既に約2万人が難民としてエチオピアに逃れている。9月下旬現在、両州において戦闘は継続しており、停戦の見通しは立っていない。

9月下旬に今井は再度首都ハルツームに入り、今後の事業の見通しを立てるため現地情勢や避難民の状況について情報収集を開始している。(今井)



■「北海道国際協力フェスタ」でスーダンの話をする今井。

南アフリカ

■HIV/エイズ(リンボボ州)

引き続き、今後の活動の検討のためにカプリコーン郡・ベンベ郡の両活動地を訪問、情報収集を進めている。ベンベ郡では8月も在宅介護ボランティアの家庭訪問活動に同行して活動の様子を観察。HIV陽性者サポートグループ参加者へのインタビューも行なった。

これとは別に、9月後半には各団体の関係者参加のもとでワークショップやミーティングを実施する予定。ここで出てきたパートナー団体の今後活動計画提案等を受けて、JVCと協働できる部分を協議する。これを基にJVC内部で10月に新規プロジェクトを提案する方向で進めている。

■地域住民を対象とした菜園研修(ハウテン州ソウェト地区)

ジョハネスバーグ市の南西にある旧黒人居住地区・ソウェトにて中学校の敷地を利用して地域住民(約10名)対象の菜園研修を実施。今年度で活動期間に区切りがつくことを受けて、菜園の管理や栽培状況を見るために研修開催の頻度を落としている。7月と9月は研修を実施せず、スタッフが現場を訪問、状況のフォローアップを行なった。

これまでなかなかうまくいかなかった野菜の消費動向(消費、販売、寄付など)と食事内容の記録をあらためて方法を変えて試し始めた。9月に確認したところ、2名については完全でないながらも記録ができるようになっていた。8月17～19日に研修時には液肥が正しく使えているかなどこれまで学んできたことの確認した。(渡辺)



■液肥のおかげで虫がつきにくくなった。

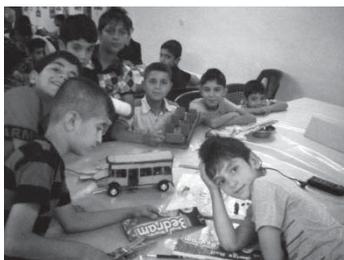
イラク

■地域社会支援

7月よりキルクークで実施した「子どもたちとつくる地域の平和」ワークショップが7週間の予定を終え終了。最終日の8月25日には工作品を展示し、歌を披露して民族や宗教の違いを超えて参加した子どもたちの交流の成果を発表した。保護者をはじめ地域の若者も巻き込み、ワークショップにより多くの地域の人々が関心を持つようになった。

■緊急支援(イラン国境地域)

イラク北部のトルコやイランと国境を接する地域で、クルド民族独立を狙う武力闘争組織の拠点を攻撃するとともに、7月以降イランによる国境越えの砲撃が激化している。付近の村落が被害を受け、一般住民が避難を余儀なくされているので、現地NGOのREACHが実施する衛生キット配布の緊急支援活動を支援した。(原)



■地域の名前を付けた「平和のバス」をつくる。

タイ

■農村派遣研修

第12期プログラムを開始。8月24日から日本研修が始まり、インターン6名は座学と千葉の農家で農作業体験。9月からは東北タイのカオデー農園でタイ語と農業研修。タイのNGOも訪問し、タイの農業や社会状況を少しずつ学んでいる。

■日タイ若手農民交流

10月に東北タイのヤソトーン県で開催する「日・タイ若手農民交流シンポジウム」に向けて準備中。(以上宮田)

■南タイでの在タイビルマ人医療支援

9月初旬に中京大学のゼミ生と共に南タイのプロジェクト地でフィールドワークを実施。大学生が帰国後にどのような支援が可能かを話し合った。また、タイで活動するビルマ人支援のNGOを訪問し、ビルマ国内のNGO活動について情報収集した。(下田)



■農作業研修を受けるインターン生。

パレスチナ

■ガザ栄養改善支援

貧血予防のために幼稚園児に対し西岸産の牛乳とガザ産のビスケットを配布する事業は、9月からの新学年度も300～400人を対象に事業実施予定なのでその準備を進めている。

貧困の厳しい村で昨年度から実施していた養鶏事業は、今年新たに12家族が取り組んでおり、配布した鶏が卵を生み始めた。9月には女性たちが集まり、子どもたちの健康を守るための衛生・栄養に関する講習が行なわれた。なお前年度参加の10家族については、卵を孵化させて鶏を増やしたり、卵を販売して収入を得るなど、支援が終了しても各自で続けていることが確認できた。

ガザ市内で子どもの栄養失調予防を目的とした活動を実施中。50名以上の母親リーダーが、子どもの貧血、栄養失調の検査や母親たちに対する栄養・健康教育を行なっている。栄養価の高い食材を使った調理実習も組み合わせて行なっている。また、高栄養ビスケットも配布開始予定。

■健康教育・巡回診療支援

現地の医療NGOと協力し、エルサレムの壁の両側の学校や幼稚園などで健康診断、保健教育などの活動を実施。夏休み期間中は主にサマーキャンプでの健康教育や健康診断を実施。9月から新学年度が始まり、医師と保健指導員は保健教育、健康診断、救急法講習などを学校、幼稚園、地域社会団体等で開始した。(福田・津高)



■幼稚園児に対して手洗いなどの衛生面について教える保健指導員(左)。

アフガニスタン

7月10～18日、日本から現地代表と調整員2名が1年ぶりに現場に入り、中期計画(11～14年)の成果を測る指標や活動の進捗を確認した。また、地域保健医療活動のプロ



■村の保健委員会メンバーと話し合う現地代表(右)。

■女性と子供の健康改善のための地域保健医療事業

これまで実施していなかったゴレーク村で母親教室を開始した。安全な出産や病気予防の知識と実践が広がり、診療所の患者数が減ることを期待している。また、クズ・カシュコート村の保健委員会から、マラリア予防のために水溜りを埋めたりごみを除去するなどの自主活動の実践が報告された。今後、さらにフォローアップしていく。

■教育支援活動

一昨年度まで4年間実施した教員研修の振り返りの結果として開催することになった、教員どうしが学び合える「授業研究」の準備を開始。教師間の知識や技能の差を縮めることを目指す。

■政策提言

国連から派遣された調査団がジャララバードを訪れ、人道支援の達成状況についてNGOと会合をもった。軍隊に活動を妨害された医療系NGOなど参加した多くのNGOから現状について積極的な発言があった。(谷山由)

コリア

■絵画交流『南北コリアと日本のともだち展』

◎ソウルワークショップ

韓国の協力団体・オリニオックドム主催の「東アジア子ども平和ワークショップ」が8月上旬にソウルで開催された。韓国在住の子どもたちのほか、中国から3名、日本からは小中学生6名が参加した。非武装地帯へのフィールドトリップなどを含め、東アジアの平和について考える3日間を過ごした。また、『ともだち展』の今年の共同制作である「ともだち列車」づくりもおこなった。



■グループで作った風。南北休戦ラインに近い臨津閣の公園で風揚げをした。

◎ピョンヤンワークショップ

ピョンヤン市ルンラ小学校とチャンギョン小学校で、8月下旬に共同制作をおこなった。朝鮮学校に通う6名のほか、日本の子ども1名が初めて日本から訪問し、共同作業や交流会を楽しんだ。ルンラ小学校では、音楽部やサッカー部の子どもたちも自分の姿を描いて「列車」に乗せた。参加したピョンヤンの小学生からは「日本に自分の作品を届けられるのがとてもうれしい」との感想が寄せられた。(寺西)



■自分の乗った汽車を紹介するサッカー部の女の子。(ルンラ小学校にて)

イベント報告

九・一一から十年
シンポジウム

「希望を探して…」



「九・一一」事件から十年を迎え、九月十七日に新宿区の経王寺で追悼慰霊祭が催された。法要に先立ち、JVCとアユス仏教国際ネットワークの協力によるシンポジウムを開催した。四十名前後の来場者があり、インターネット中継も行われた。

九・一一後、「対テロ戦争」の名のもとに行なわれたアフガンスタンやイラクへの攻撃とその後の混乱。多くの命が失われ続けている中で、誰を「追悼」するのか、宗教の役割は何か、平和な社会のために何ができるのかを考えた。

国内ひろば

JVC network

最初に、アジアプレス・インターナショナル代表の野中章弘氏が、九・一一後の戦争で奪われた命には日本人にも責任があり、戦死者を英雄としてしまう追悼と顕彰の思想が靖国にも通じる日本の問題であると指摘した。

続いてJVCアフガニスタン事業担当の長谷部と、イラク事業担当の原がそれぞれの国の現状と、JVCの支援活動の様子を報告した。治安が悪化の一途をたどるアフガニスタンでは、武力による問題解決は不可能で、日本は和平交渉の推進役を果たすべきと

して、軍事と切り離れた人道・復興支援の必要性を強調した。イラクは、国内対立の結果、社会の分断が進み、暴力がやまず、貧富の格差が拡大するなどの問題が残る中で、復興に向けて、草の根の市民対話を支援することの重要性を訴えた。

続いて、再び野中氏がビデオ映像を用いて九・一一後の戦争報道を紹介し、日本の報道機関が必ずしも現場の事実を正確に伝えてこなかったことを示した。

後半は、日本女子大文学部教授で中東専門家の臼杵陽氏（ウシキヨウ）が加わり、ディスカッションを行なった。臼杵氏は、「対テロ戦争」は七九年のイラン革命以来のアメリカの世界戦略の中で形成されてきたものとして指摘。政治的な問題を宗教問題にすり替え、キリスト教との対立構造を「文明の衝突」と説明することでイスラムの多様性が過小評価されがちだと述べた。ディスカッションでも、文化の多様性を認めることが互いを敵視することを避け、平和な社会を築く鍵であることが浮き彫りになった。（イラク事業担当 原文次郎）

JVC 国際協力コンサート2011

JVC 国際協力・東日本大震災被災地支援コンサート



■ 延原武春氏。

イベント詳細

第23回東京公演
バッハ『クリスマス・オラトリオ』

2011年12月4日(日)15時開演
昭和女子大学人見記念講堂

第18回大阪公演
ヘンデル『メサイア』

2011年12月10日(土)16時開演
いずみホール

チケット購入はコンサート事務局までご連絡ください。

毎年冬の気配が濃くなる季節に、大阪と東京で大勢の方にお楽しみいただいております「JVC 国際協力コンサート」。今年は国際協力と、東日本大震災被災地の支援のために開催いたします。

震災直後には、これまでご協力いただいた指揮者やソリストの方たちから「なにかできることは？ 力になりたいです」「日本のために祈っています」など多くのメッセージが寄せられ、「縁」の強さを感じました。また、合唱団員さんからは、折にふれ震災ボランティアの参加方法について尋ねられました。国内外から多くの方たちに支えられ、今年もJVCはコンサートの準備を着々と進めております。

今回は、バロックからベートーヴェンまで、「十八世紀音楽の専門家」として評価が高い延原武春氏を指揮に迎えます。ソリストは英国、米国より招聘し、今年も多彩な顔ぶれでお楽しみいただけます。

クリスマスの季節に音楽を聴く「チケット一枚のボランティア」に、ぜひご参加ください。

(コンサート事務局 石川朋

募金にご協力ありがとうございます

JVC の活動は、皆さまの募金に支えられています。
JVC への募金は税制優遇措置を受けることができます。

① JVC 募金 (郵便振替)

JVC の各国での活動に役立てられます。募金先をご指定いただくこともできます。

口座番号：00190-9-27495
加入者名：JVC 東京事務所

7月計 2,006,368 円
8月計 2,007,625 円

	7月	8月
無指定	57,000円	888,000円
タイ	15,000円	3,000円
カンボジア	39,500円	18,000円
ラオス	36,500円	11,000円
南アフリカ	8,000円	15,000円
パレスチナ	231,680円	142,646円
アフガニスタン	98,000円	590,367円
コリア	16,500円	0円
イラク	12,500円	1,667円
スーダン	2,500円	7,500円
東日本大震災	1,479,188円	295,745円
東アフリカ緊急	10,000円	34,700円

※上表には「夏/冬の募金」は算入していません。

② 犬養道子「みどり一本」募金

JVC 活動地での環境保全活動に使われます。

口座番号：00100-8-212497
加入者名：犬養道子「みどり一本」

7月計 140,500 円 /15 件
8月計 65,946 円 /14 件

③ JVC マンスリー募金

銀行や郵便局の口座、クレジットカードから自動引き落としができる手軽な募金方法です。

7月計 2,086,750 円 /1,802 件
8月計 2,150,250 円 /1,841 件

編集後記

震災からもう7ヵ月が過ぎた。たまに、「今回の震災被災地に対して(仕事以外で)なにができるだろう」とか考えると、自分の手持ちのリソースの少なさに改めて愕然とする。「口先よりも頭と手を動かせ」と前職で叩き込まれた。問題は分野とタイミング。忘れないこと、考え続けること、あきらめないこと。9月末から一気に気温が下がった。東北はもっと寒いのだろうか。(H)

国際有機農業映画祭 2011 「それでも種をまく」

映画祭運営委員会代表 大野 和興



農や食、自然と人とのつながり、土の世界などを描いた内外の映像を紹介してきた国際有機農業映画祭は今年で五周年を迎え、東京・代々木のオリンピック記念青少年総合センターで11月19・20日の両日開催されます。

今回のテーマは《それでも種(たね)をまく》。3月11日に東日本を襲った大震災と原発事故は農業もまたずたに壊し、数十年をかけて肥やしてきた土も放射能で汚されてしまいました。不安と悲しみ、怒りを胸に耕し、種をまく百姓の思いを、映像を通して伝えたいという願いから、このテーマを選びました。同名のタイトルで映画祭運営委員会の自主制作映画も上映します。また、各地の有機農業者を招いてのシンポジウムも行ないます。参加費は1日1,800円。シンポジウムの内容やチケットの入手方法などは、映画祭のウェブサイトをご覧ください。

■タイムテーブル

11/19 (土)	『セヴァンの地球のなおし方』
	『土』
	『祝の島』
	『ブツダの嘆き』
	『それでも種をまく』
11/20 (日)	シンポジウム1
	『攻撃にさらされる科学者』
	『農家から農家へ』
	3分ビデオ
	『ダート!』
	『暴走する生命』
	シンポジウム2
	『ミツバチからのメッセージ』
映画解説 わたしの農業体験	

■ウェブサイト:

<http://blog.yuki-eiga.com/>

2011 年夏募金

ご協力ありがとうございました!

震災の影響で海外向けの寄付が減ってしまうだろうかと心配していましたが、皆様のご協力で昨年額の9割以上の寄付金をいただきました。下記以外にも、被災地や特定の国を指定した寄付を187万円(200件)いただきました。ありがとうございます。

2011 年夏募金集計 (郵便振替分: 9月末現在)

847 件 6,486,331 円

- ・活動国を指定された募金は上記に含まれません。
- ・上記夏募金の金額は、ページ左上の JVC 募金の欄には含まれていません。
- ・募金額の20%を管理費とさせていただきます。

JVC ウェブサイト 会員専用パスワード (2011 年 11 月 ~ 12 月):

QwN7hPgaiB

JVC ウェブサイトから T&E のバックナンバーをダウンロードするときには必要です。



JVC CALENDAR
2012

いのちの輝き

写真 松尾純
Photographs by Jun Matsuo



Trial & Error (試行錯誤) 二百九十一号 二〇一一年十月十日発行 (通巻二百九十一号・隔月二十日発行)

発行人 山田博史
編集人 大野和興、清水俊弘
編集スタッフ 細野純也

発行 日本国際ボランティアセンター (JVC) 東京事務所
〒一〇〇・八六〇五 東京都台東区東上野一・二〇・六 丸幸ビル六階
電話 (〇三) 三三三三・三三三三
印刷 ベスト・プリンティング

定価 五〇〇円 (税込)

好評
発売中

壁掛カレンダー	1,500円
卓上カレンダー	1,200円
ポストカード (6枚組)	500円
スマイル年賀状 (10枚組)	500円

JVC 国際協力カレンダー 2012

『いのちの輝き』

写真：松尾純

2012年カレンダーは若手女性カメラマン松尾純氏の協力を得て、アジアを中心に人々の自然に溶け込んだ生きる様でつづりました。収益は、アジア・アフリカ・中東での協力活動のほか、今年は東日本大地震の被災の方々への支援活動にも使わせていただきます。



日本国際ボランティアセンター (Japan International Volunteer Center) は、1980年2月、タイのバンコクで誕生した市民による国際協力団体です。JVCの活動目的は、国際社会のなかで、社会的、精神的、物理的に困難な立場を強いられるアジアやアフリカ・中東の人びとに協力すると同時に、地球環境を守る新しい生き方と人間関係をつくり出そうということにあります。そのため私たちは、自らの意志でJVCに参加し、活動を継続してきました。JVCはボランティアという言葉や「自発的意志をもって、責任ある行動をとる」という意味で団体名として使っています。

■ JVC では会員を募集しています。

会員は総会に出席し、JVCの方針などを決定するほか、情報・資料の入手、各種の活動・報告会・学習会等へ参加することができます。会員の方には年6回この会報誌と年次報告書をお届けします。

- ◎一般会員 10,000円
- ◎学生会員 5,000円
- ◎団体会員 30,000円

※それぞれに正会員と賛助会員があります。入会のお申し込み、会員の方のメールマガジンのお申し込み、住所変更などは会員担当の寺西へ。
→ s-tera@ngo-jvc.net

■ オリエントーション (説明会) にお越しください。

JVCの活動内容をご紹介します。お気軽にご参加ください。会場はJVC東京事務所、参加費は無料、予約不要です。

- ◎第1月曜日午後7:00 - 8:30
- ◎第2・第4土曜日午後2:00 - 3:30

■ E-mail info@ngo-jvc.net

■ ウェブサイト http://www.ngo-jvc.net/

※本誌の記事・写真等の無断転載・複写を禁じます。
※本誌は、日本の森の間伐材を有効利用して作られた用紙「間伐材印刷用紙」(古紙90%、間伐材パルプ10%)で作成しました。



会員数 (10月5日現在) 合計 1,219名
(正会員 597名、賛助会員 622名)